

付載 箕岡市内の製鉄遺跡

井原市の南部から箕岡市北部にかけて広がる丘陵地帯では、従来から何ヵ所かの製鉄関連遺跡が知られているが、近年では広範囲にわたる遺跡分布調査によってさらに多くの鉄滓散布地が発見されている。ここでは、箕岡市内で現在までに見つかっている製鉄関連遺跡等を集成し、紹介したい。特に、尾坂の賤ヶ遺跡については、簡易な調査が実施されているので、あわせてその結果を報告したい。

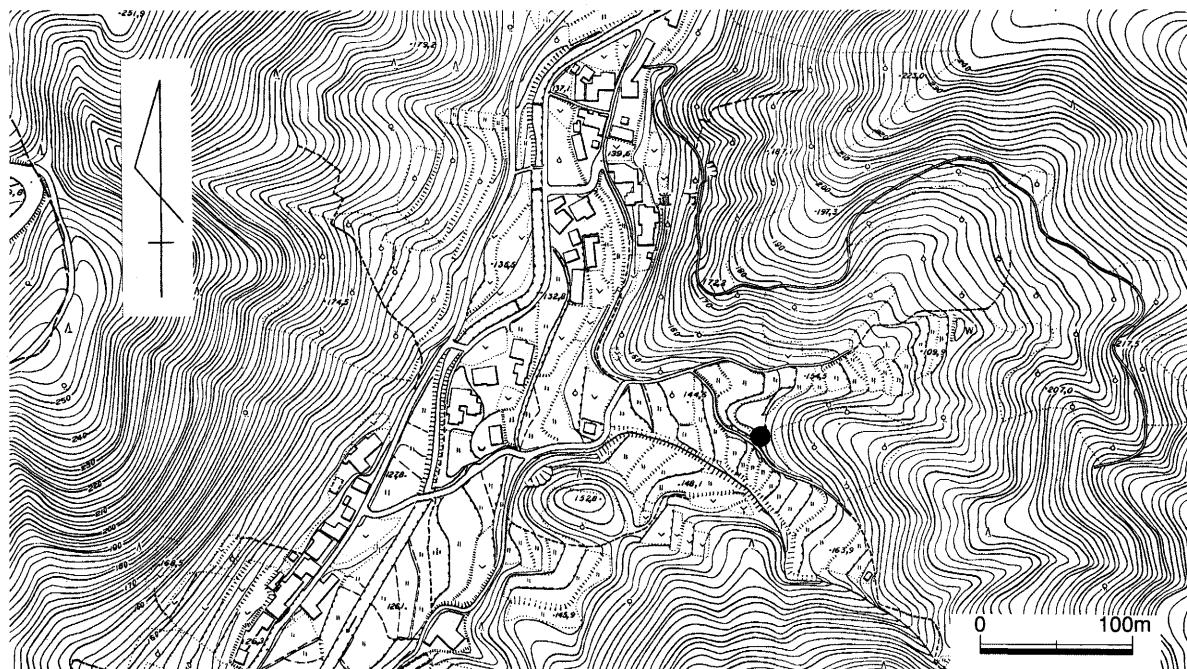
1. 賤ヶ遺跡（道万遺跡） 所在地：尾坂字賤ヶ 1515番地

（調査の経緯）

賤ヶ遺跡は、尾坂地区の谷筋からさらに東に派生した小さな谷の中にある。この谷の中で、小さな丘陵が東から西に向かって突き出しているが、遺跡はその西麓に位置している。1986年（昭和61年）4月、山の斜面が自然に崩落して、偶然にも遺構の断面が露出したことから、箕岡市文化財保護委員により発見された。

現地は山麓の傾斜地であり、さらに遺構の崩壊が進行する恐れがあったことから、箕岡市文化財保護委員会と箕岡市教育委員会は、1989年（平成元年）12月4日から5日にかけて崩壊部分の発掘調査を実施した。調査は文化財保護委員8名と文化課職員2名の手により行われた。

調査参加者 箕岡市文化財保護委員 中野勇 内山哲次 小寺謙助 高田博夫
仁科保二 平井宏二 間壁忠彦 松浦竜司
文化課 係長 山部咲美 主事 岩崎仁司

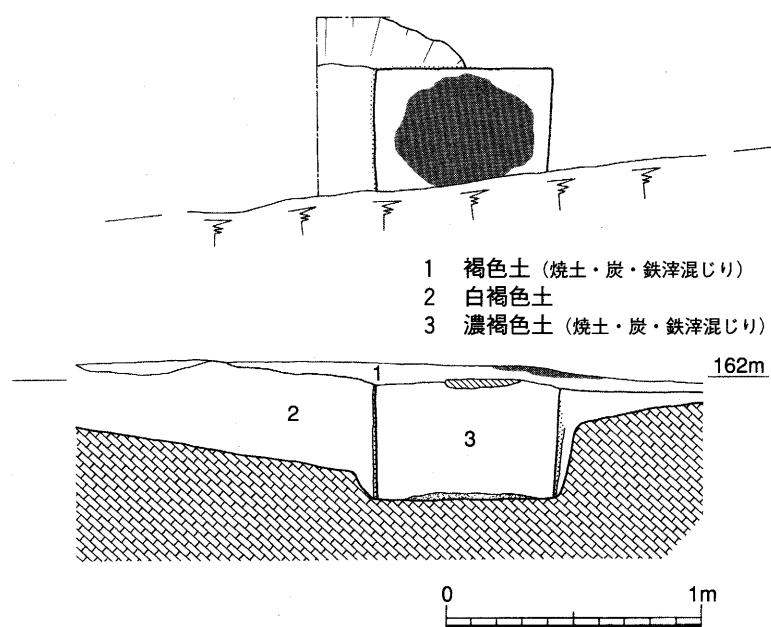


第21図 賤ヶ遺跡位置図（1/5,000）

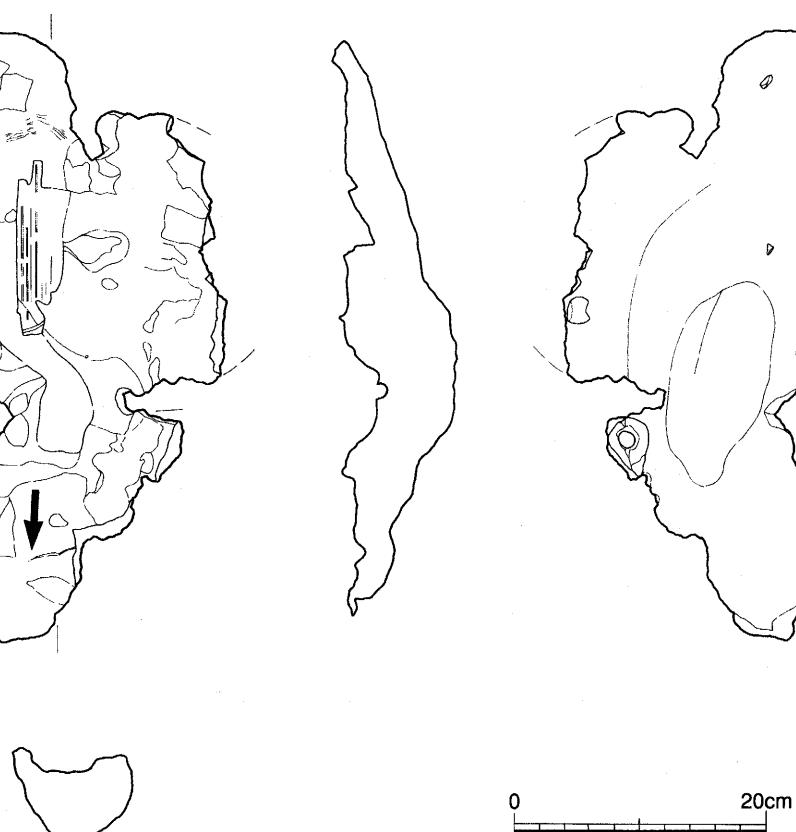
(調査結果)

調査の対象となった遺構は、製鉄炉の下部構造1基である。(第22図、図版13) 調査の方法としては、下部構造の断面が崖面に露出していることを利用して、内部の土を横から掻き出すような形で行った。このため調査は、遺構の規模を確認するにとどまる、きわめて限定的なものとなった。調査対象となったのはこの1基のみであるが、隣接してもう1基の製鉄炉の存在が確認されている。

調査された下部構造は、長辺側に沿って断面が露出していたものと思われ、上面で長さ72cm、残存幅最大で47cm、深さ43cmを測った。壁はほぼ垂直に立ち、2.5~3cmの厚さで粘土を貼っていた。下部構造の底部はよく焼けて締まっており、その上に薄く炭層が存在した。さらにその上に詰まった焼土・炭・鉄滓混じり褐色土層の上面には、盤状



第22図 賢ヶ遺跡製鉄炉平・断面図 (1/30)



第23図 賢ヶ遺跡出土炉底塊 (1/6)

の滓（炉底塊）が遺存していた。下部構造の短辺側上面はよく焼け締まっていたが、調査範囲が限られていたため、排滓溝等の検出はできなかった。

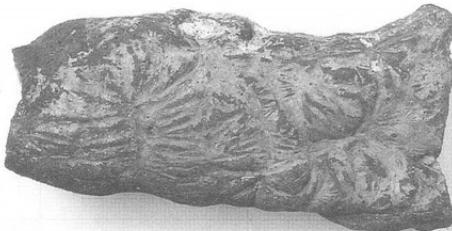
調査終了後、遺構は土のう袋とシートで保護措置がとられ、現状保存されている。

取り上げられた炉底塊（第23図、図版14）は、断面を露出していた部分を欠失しているほかは、他に目立った破面はない。流出孔滓から流出滓へと続く一体の滓で、炉底に操業終了時のままの状態で遺存していたものと思われる。図面下側が流出滓部分で、上側が炉底塊、その間の細くなった部分が流出孔滓にあたると思われる。炉底塊及び流出滓の部分は扁平な形状をしているが、流出孔滓にあたる部分は断面楕形で、底面がふくれている。流出孔滓の幅は約10cm、長さは約11cmであり、炉壁の痕跡は明確に残っていないが、その側面には木舞孔流入滓と思われる内径1.2cmの円筒形の滓が付着している。炉底粘土は、炉底塊部分から流出滓の基部にかけて付着している。長径48.5cm、短径27cm、厚さ8.6cm。磁着度は弱く、メタル度はない。

2. 山口中ノ才遺跡（山口製鉄跡）(1) 所在地：山口字中ノ才

阿部山の西麓、西向きの緩斜面上に果樹畠があり、ここに多量の鉄滓が散布する。分布の中心は池の南側であり、池の中にも鉄滓が転がっている。遺跡の時代を判別できる遺物はまだ見つかっていない。さらに付近にはカナグロ山という地名も残り、広い範囲で鉄滓の散布がみられる。

2002年（平成14年）に、表面採集された鉄滓1点の化学組成の分析を行う機会があった。（第24図）資料は、肉眼観察から流出滓と考えられ、長径10.3cm、短径5.3cm、厚さ2.5cm、重量217.5gを測った。分析は川鉄テクノリサーチ株式会社分析・評価事業部水島事業所に依頼して行った。その結果、全鉄分（Total Fe）が36.2%、バナジウム（V）が0.005%であった。砂鉄を原料とする製錬滓は、二酸化チタン（ TiO_2 ）とバナジウム（V）をより多く含有するので、この点で鉱石原料のものと区別できるという（2）。このことから、試料は、鉱石製錬滓であると考えられた。



第24図 山口中ノ才遺跡分析資料

3. 福之谷遺跡（3） 所在地：走出字福之谷

走出の井立集落の北側にある丘陵の鞍部に、鉄滓の散布が確認されている。昭和30年頃までは真砂土の地表面が露出していたが、現在では藪になっている。

なお、福之谷の地名は、「吹くの谷」すなわち、ふいごを吹く谷の福称とも考えられている。

4. 鍛冶屋遺跡（4） 所在地：小平井字鍛冶屋

鉄塊遺跡の南南西約2.2kmに位置する。山陽自動車道の建設に伴って、1984～87年（昭和59～62年）に、岡山県教育委員会によって発掘調査が行われた遺跡である。弥生時代から江戸時代に至る各時期の遺物・遺構が見られたが、本遺跡を特徴づける要素のひとつが、製鉄関連遺物・遺構の存在であった。金属学的調査の結果、6世紀後半及び13世紀頃に、鉄鉱石を原料として製錬・精錬鍛冶（大

鍛冶)・鍛錬鍛冶(小鍛冶)の製鉄一貫作業が行われていたことが判明している。

また、奈良時代から平安時代前期の掘立柱建物は倉庫と考えられ、郷倉の可能性が指摘されている。

5. 蜂村遺跡(5) 所在地：東大戸字庚申5040番地1

笠岡市と井原市との境界線にあたる丘陵の南側中腹、緩い傾斜地に位置する。北ノ新池南西側の谷筋にあたる。

平成元年1月、岡山県立西備養護学校が、生徒の実習として山林を切り開き、そこを開墾していたところ、表土下すぐの位置で、鉄滓を伴って焼土塊と薄い木炭層が確認されたことにより発見された遺跡である。その後現地は現状のまま残され、調査を行っていないため詳細は不明である。浅い場所での発見であるため、この遺構の残りはあまり良くないものと思われる。

6. 阿部山鉄滓散布地(5) 所在地：尾坂字北山

標高350mに近い阿部山の山塊上で、尾根北斜面に鉄滓が散布するという。

7. 尾坂亀居遺跡(尾坂製鉄跡)(6) 所在地：尾坂字亀居2756番地

鴨方町との境界をなす丘陵の麓、東から下る傾斜面に存在する。地下0.5～1mから多量の鉄滓が出土する。

8. 小原井遺跡(7) 所在地：尾坂字小原井

尾坂亀居遺跡の西方約500m。小さな池が点在しており、その池の中に鉄滓が見られる。池の北側に尾根があり、これを含めて製鉄炉が存在する可能性が指摘される。

9. 吉田の炭窯跡(8) 所在地：吉田字田平・尾迫

通称「ヤツメウナギ」と呼ばれる横口付き窯跡があるという。

10. 三山口鉄滓散布地(9) 所在地：入田字三山口

北から南に伸びる尾根及び谷の周辺や、通称ヤジロ谷にある池の底に鉄滓が多量に堆積している。また、地表下約40cmのところで炭層が20cm以上の厚さで堆積しているという。

11. 時末遺跡(9) 所在地：入田字時末

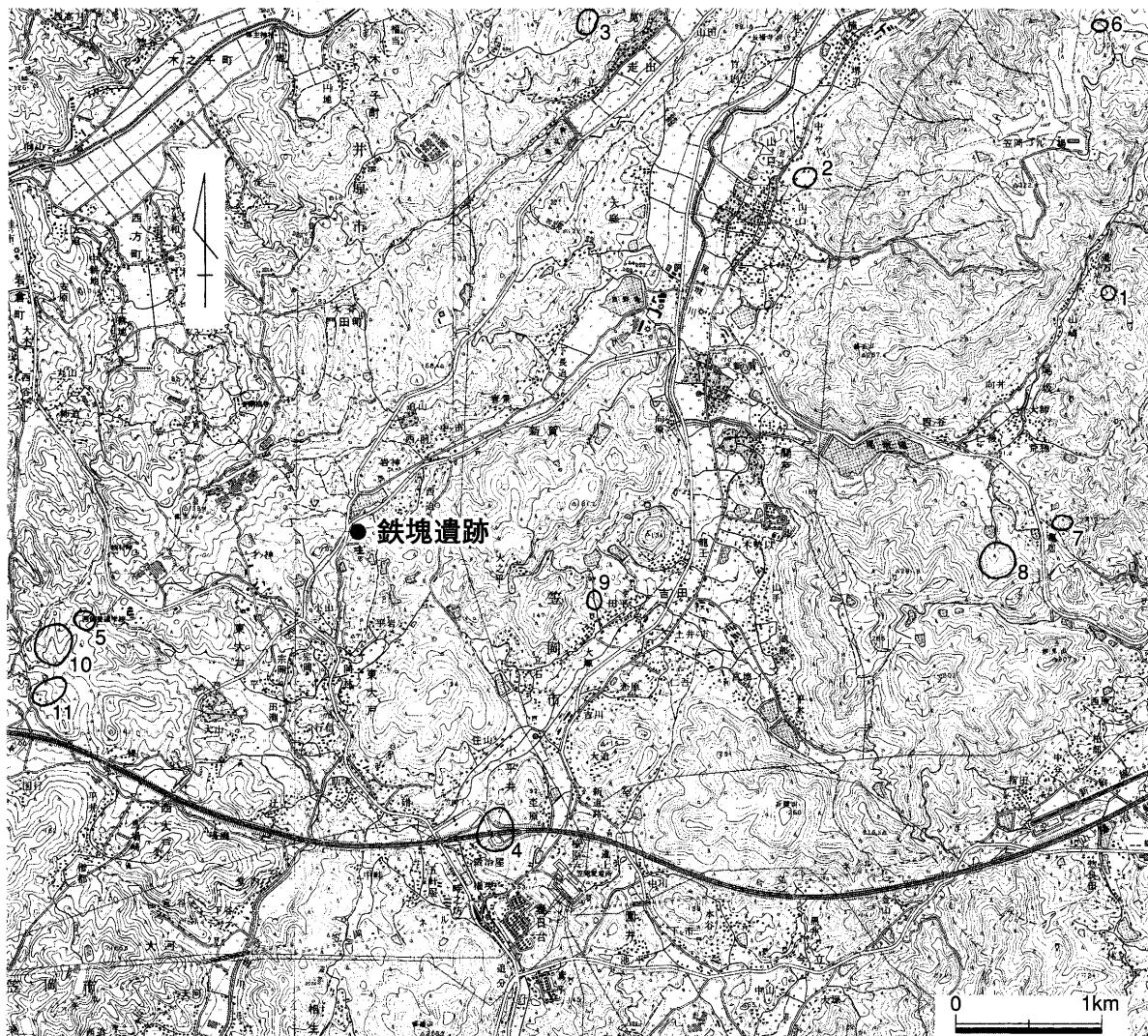
南西方向に広がる谷部および周辺の斜面。水田に暗渠を入れるために掘削した時に鉄滓を発見した。

これまで述べた周知の遺跡のほかに、参考までに市内の小字名で製鉄・鍛冶に関係しそうな地名を列記しておくと、次のとおりである。

吹ヶ谷(小平井)

鍛冶迫(園井)、鍛冶屋(吉田)、鍛冶谷(生江浜)、カジヤ迫(篠坂)、梶屋(東大戸)、

梶谷(茂平)、梶ヶ迫(東大戸)、



第25図 笠岡市内製鉄関連遺跡分布図 (1/5,000)

註

- (1) 笠岡市史編さん委員会「原始編 第四章古墳時代」『笠岡市史』第一巻 笠岡市 1983年
- (2) 大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会 1983年
大澤正己「鍛冶屋遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988年
- (3) 笠岡市史編さん室「各論 第22章走出村」『笠岡市史』地名編 笠岡市 2004年
- (4) 岡田博・福田正継・松本和男「鍛冶屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988年
- (5) 岡山県古代吉備文化財センター「第4分冊 井笠地区」『改訂岡山県遺跡地図』岡山県教育委員会 2003年
- (6) 註(1)文献
- (7) 註(5)文献
- (8) 註(4)文献
- (9) 註(5)文献